

## 生の哲學について

—

古來、哲學と稱せられるものは、何等かの意味に於て深い生命の要求に基かざるものはない。人生問題といふものなくして何處に哲學といふべきものがあるであらう。かういふ意味に於て、私は生の哲學と云はれるものに對して多大の同情を有つものである。併し生命といふ如きものを根本概念として一つの哲學を組織しようと云ふには、先づ生命といふものが如何なるものなるかを明にして置かねばならぬ、生命と論理との關係が極められてゐなければならぬ。無論、生命といふ如きものは論理的に證明することもできなければ、概念的に捕捉することのできるものでもない。而も生命は直接の事實として何人もそれを知らないものはないと云ふでもあらう。併し生の哲學といふものが一つの哲學的體系として學問性といふものを要求するには、生命の論理的意義といふ如きものが深く掴まれてゐなければならぬ。生命といふものふあ單に論理を越えたものであるならば、哲學の根本概念とする

428

こともできない。今日、生の哲學と考へられるものには色々の種類があり、それぞれの立場に於てそれぞれの意義を有するものであらうが、唯、その根本概念たる生命と論理との深い内面的關係について考へられて居ない。そこに生の哲學と云はれるものの根本的弱點があり、哲學の學問性を要求する人々から生の哲學に加へられる批難もそこに基くと思ふ。生命の論理的捕捉といふ如きことは固より所謂論理的に能くし得ることではなく、そこに辯證法的論理といふ如きものが考へられるのであらう。ヘーゲルの哲學は所謂生の哲學といふ中に入るべきものでないかも知らぬが、かういふ意味に於て却つて眞の生の哲學の意義を有つと考へることもできるであらう。併し何處までも理想主義の立場に立つてゐたヘーゲルは辯證法の眞意義を掴むことができなかつたと共に、眞に生命を論理的に掴むといふこともできなかつたと云ひ得るでもあらう。

私は眞の生命といふものは、唯、我々の人格的自己の自覺から考へられるものと思ふ。我といふものなくして眞の生命といふものなく、人格的といふことなくして眞の我といふものはない。眞の生命といふものはノエマ的に知られるものではなくして、ノエシ的に知られるものでなければならぬ。我々は普通に生物の有機作用といふものによつて生命といふものを考へる。併し目的因果は直に生命ではない、生物的現象といふ如きものは、科學的には畢竟機械的因果に還元するの外なく、その合

目的性といふ如きものは要するに我々の圭観によつて附與したものと考へる外ない。意識なくして生命といふものはない。如何なる意味に於ても自然に還元のできない生命と考へられるものは、我々の意識の事實に求めるの外ない。心理學者は自覺的意識なくして意識現象といふものがあると考へるであらう。自覺的意識といふのは却つて】種の意識に過ぎないとも云ふであらう。併し意識統一といふものなくして意識といふものはない。意識の統一に於ては、統一するものが統一せられるものの外にあるのではない、部分の中に全體が含まれて居るのである、一步一步が全體の意味を具して居るのである。所謂自覺的意識として考へられる特殊の意識といふものが、我々の意識を統一する自己ではない。さういふ意味に於ては、我々の自己は何處までも意識せられないものでなければならぬ。眞の自覺といふべきものは自己が自己に於て自己を見る無限の過程と考へられるものに過ぎない、無限なる過程の行先がその出立點に含まれて居るといふことを意味するに外ならない。かゝる意味に於て有ると考へられるものは、全體から部分が考へられるのでなく、部分から全體が考へられるといふ意味を有つたものでなければならぬ。一般者の自己限定として個物が考へられるといふ意味に於て考へられるのでなく、逆に個物が個物自身を限定することによつて一般者が考へられるといふ意味に於て考へられるものでなければならぬ、點から點に移るといふ意味を有つたものでなければならぬ、非連続の連続として考へられるものでなければならぬ。意識の統一といふものなくして意識現象といふもの

なく、意識統一といふものは右の如き意味を有つたものでなければならぬ。自己といふものなくして意識現象といふものがないと考へられる所以である。具體的意識と考へられるものは、いつも自己自身の底から自己を限定する意味を有つたものでなければならぬ、限定するものなきものの自己限定の意味を有つたものでなければならぬ。輩なる無自覺的意識といふ如きものは、ノエシス的限定を極小とすることによつてノエマ的方向の極限に考へられた意識の一面に過ぎない。自己といふものなくして意識といふものなく、自己といふものが右の如きものとするならば、我々は尚一層深く我々の自己といふものについて考へて見なければならぬ。眞の自覺的限定といふものは如何なるものであらうか。我々は普通に知的自覺といふものを自覺と考へて居る。併し我々の自己は軍に所謂内部知覺といふ如きものによつて意識せられるのでもなく、又輩なる思惟の意識といふ如きものでもない。我々の自己は自由なるものでなければならぬ、働くものでなければならぬ。内部知覺的自己の自覺と考へられるものも、その實、行爲によつて裏附けられて居るものでなければならぬ。行爲といふものなくして自己といふものはない。眞の自覺と考へられるものは行爲的自己の自己限定

の意味を有つたものでなければならぬ。従来、内省的事實に基いて内的連続として自己といふものが考へられた。我々の自己といふものは單に外に考へられるものでないことは云ふまでもないが、然らばと云つて單に所謂意識内に考へられるものではない。我々の自己の底には自己自身を超越するもの

431

がなければならぬ。内が外であり外が内である所に、眞に具體的なる意識の事實が考へられるのである。それでは、我々の行爲的自己と考へられるものは如何なるものであり、如何にして考へられるものであらうか。行爲的自己の自己限定の底には何處までも自己を越えたものがなければならぬ、非合理的なるものがなければならぬ。我々の眞の自己と考へられるものは、單に理性といふ如きものでもなければ、内的連続として所謂意識的自己といふ如きものでもない。行爲的自己として我々は客觀的なるものに、否、非合理的なるものに基礎附けられて居なければならぬ。併し自己の根柢に單に非合理的なるものが考へられるならば、自己といふものはない。如何なる意味に於ても、單に自然と考へられるものから我々の自覺は出て來ない。かゝる立場からは、我々の行爲と考へるものも、要するに單なる運動と考へられる外はない。我々に眞に自覺といふものが考へられるかぎり、我々は何處までも我々自身の底に他を見ると考へなければならぬ。我々の知識とか行爲とか考へられるものは、かゝる自覺に基礎附けられて居るのである。是に於て我々の行爲的自己の自覺の根柢として客觀的精神といふ如きものを考へることができる。そして我々の自己がそれに於て自己自身を没入することによつて自己自身を見出すと考へる。併しかゝる意味に於て客觀的精神と考へられるものは、如何なるものでなければならぬであらうか、如何なる意味に於て客觀的存在と考へられるものであらうか。それは如何なる存在形式に於て存在と考へられねばならぬものであらうか、我々の個人的自己と考へ

432

られるものと如何なる關係に立つものであらうか。それを我々が自己の底に何處までも他を見るといふ意味に於て、所謂内的自己の深められ廣げられたものと見るならば、それによつて行爲的自己の客觀的根據を基礎附けることはできない。之に反し、それが我々の個人的自己を超越する客觀的存在として大なる精神的原理といふ如きものと考へられるならば、我々はそれによつて我々の個人的自己の自由といふものを説明することはできぬ。而も個人的自己の自由といふものなくして眞の行爲的自己の自覺といふものはない。單なる一般者の自己限定として何處まで行くも個物に到達することのできないと同様である。

是に於て、我々は我々の人格的自己の生命と考へられるものが如何なる意味に於て成立するかを深く考へて見なければならぬ。我々の人格的自己の生命と考へられるものは、先づ時に於て流れるものと考へられるであらう。併し眞に我々の人格的自己の生命といふべきものは、所謂内的持續といふ如

きものではなくして、その一瞬一瞬が獨立であり自由であると考へられるものでなければならぬ。その一步一步が絶対に接すると考へられるものでなければならぬ。人格的自己の生命と考へられるものは、かゝる非連続の連続として考へられるのである。故に現在の私から見れば、昨日の私も汝であり、明日の私も汝でなければならぬ、否、我々は各瞬間に於て斯く考へねばならぬ。かういふ意味に於て我々の全人格の統一と考へられるものには、社會的といふ意味がなければならぬ。而もそれは非連続

433

の連続として、時間的に自己自身を限定すると考へられるのである。我々の人格的自己の生命と考へられるものは社會的・歴史的に自己自身を限定すると考へることができる。私が人格的統一の原理としてアガペといふ如きものを考へる所以である。この瞬間の私を私として限定するものは、單なる自然といふ如きものではなくして、前の私でなければならぬ。而もそれは單なる私といふ如きものではなくして、この瞬間の私に對して汝の意味を有つたものでなければならぬ。又合目的に後の私が今の私を限定すると考へられる場合にも、それは單にエンテレケイアといふ如きものではなくして、やはり汝の意味を有つたものでなければならぬ。之に反し、私が未來の私を限定すると考へられる場合でも、それは單に後の私を限定するといふ意味ではなくして、後の私に對して今の私は汝に對する意味を有つてゐなければならぬ。我々の人格的自己の生命と考へられるものに於ては、各瞬間の私に對して他の各の瞬間の私が汝の意味を有つてゐなければならぬ。我々は自己の中に汝を見ることによつて我々の人格的統一といふものが成立すると云ふことができる。我々の自己自身に對する自敬の念は此に基くのである。自敬といふものなくして、我々の人格的自己の生命といふものはない。

我々の個人的自己の人格的生命といふものは右の如くにして成立すると考へられねばならぬが、我の人格的生命と考へられるものは單に個人的と考へることはできない。我々の個人的自己は生れるもの、死するものでなければならぬ。單に不生不死なるものは生きたものではない。生命の連続の一

434

環として我々の個人的生命といふものが考へられるのである。我々の人格的自己と考へられるものも、歴史に於て生死するものでなければならぬ。而もかゝる生命の根柢に單なる自然といふ如きものが考へられる時、又單なる理性といふ如きものが考へられる時、否、客觀的精神といふ如きものが考へられても、それから個人的自己の人格的生命といふものは出て來ない。個人的自己の人格的生命に於ては、右に云つた如く各瞬間が私と考へられるに對し、他の瞬間が汝と考へられねばならぬ。即ちその根柢に社會といふ如きものが考へられねばならぬ、アガペが考へられねばならぬ。それと同じく、私に對するものがすべて汝と考へられることによつて、即ち我々の個人的自己の自己限定の底に絶対のアガペを考へることによつて、神的社會といふ如きものを考へることによつて、我々の個人的自己

の人格的生命といふものが考へられるのである。個人的自己の人格的生命と考へられるものに於ても、我々は各瞬間に於て獨立であり自由であり、一步一步絶対に觸れると考へられるが、更に私と汝との間に於ては、如何なる意味に於ても、ノエマ的連続といふ如きものを認めることはできぬ。而も私は汝を認めることによつて私であり、汝は私を認めることによつて汝である。我々の個人的自己が個人的自己であるには、自己自身の底に絶対に非合理的なるものを認めねばならぬ、絶対の他を見なければならぬ。而もそれが單なる他と考へられるならば、自己といふものはない。それは絶対に他なると共に、私をして私たらしめるものでなければならぬ、即ちそれは汝といふ意味を有つたものでな

435

ればならぬ。汝と考へられるものは、絶対の他として私を否定すると共に、私を肯定する意味を有つたものでなければならぬ。私と汝とは絶対の否定を通して相見るのである。絶対の否定を通すといふことは、一面に直接に相見るといふ意味を有つて居るのである。そこにゴッタルテンも云ふ如く私と汝と相遇ふといふことによつて歴史が成立すると考へられると共に、我々は歴史に於て相見るといふ意味があるのである。私と汝との関係と云へば普通に抽象的な意識的自己と意識的自己との関係と考へられる。従つて歴史的限定を離れて私と汝との関係が考へられる如く思はれるのであるが、私と汝との関係は最も個物的なるものの具體的關係として歴史的限定を離れてかゝる關係が考へられるのではない。個物は唯、一般者の自己限定の極限として考へられるのである。カントの目的の王國といふ如きものは理性の世界であつて、行爲的自己の社會といふべきものではない、従つて生きた人格的自己の社會ではない。-

私のアガペといふのは所謂愛といふ如きものを意味するのではない、死することによつて生きるといふことを意味するのである、犠牲の意味を有つて居るのである、エロスと反封の方向に考へられるものである。我々が自己の底に絶対の他を見ることによつて自己が自己であると考へられる時、我々は絶対の他から限定せられて居ると考へなければならぬ。この瞬間に於けるこの私と考へられるものは、無限の過去から限定せられて居ると考へられねばならぬ。すべて有るものは何かに於てあり、我

436

私は無限の環境から限定せられて居ると考へられるのである。かゝる意味に於てはアガペは絶対の死の原理といふことができる、私を否定するのみならず汝をも否定すると云ふことができる。それは何處までも時を否定することによつて、空間的世界を限定することも考へることのできる永遠の今の否定面といふ如き意味を有つと考へることができる。併し我々は單に自己自身の底に絶対の他を見、他によつて限定せられると考へることによつて私が私であるのではなく、私が絶対の他に於て私を見るといふ意味に於て私が私であるのである。絶対の他は絶対に他であると共に、私をして私たらしめるも

のでなければならぬ、即ち汝といふ意味を有つたものでなければならぬ。各瞬間の私に對して他の各瞬間の私が汝の意義を有たねばならぬ如く、絶対に非連続的なものの連続として私と汝とが限定せられるのである。絶対の否定を通さなければ、汝は汝ではなくして單なる私であり、斯く汝が汝でなくなると共に私が私でなくなるのである。絶対の他の限定と考へられるものは、非連続の連続として、限定するものなきものの限定と考へられるものでなければならぬ。絶対の他の媒介と考へられるものは、絶対の無の媒介と考へられるものでなければならぬ。それで、私と汝との關係から成立して居ると考ふべき我々の社會と考へられるものは、之に於てあるものに對しては一面に死の原理たる意味を有つて居ると共に、一面に生の原理たる意味を有つたものでなければならぬ、即ち辯證法的原理の意味を有つたものでなければならぬ。我々の人格的生命の根柢に考へられる客觀的精神といふ如

437

きものも、かゝる意味に於て社會と考へられるものでなければならぬ。我々が自己自身の底に他を見ると考へる極限に於て、その他が自己であるといふ辯證法的自覺の意義によつて、客觀的精神の自己限定といふ如きものが考へられるのである。我々の個人的自己の自覺が社會的として一つの人格と考へられる如く、それも人格性を有つと考へられるでもあらう。但し兩者は自覺的限定の相反する方向に考へられるものでなければならぬ。我々がそれに於てありそれによつて限定せられる社會と考へるものの底には、深い非合理性といふものが考へられるであらう。歴史は闘争と罪惡の歴史と云ふこともできる。併し社會的限定の底に、何等かの意味に於て自然といふ如きものが考へられるならば、それから人格的生命といふものは出て來ない。闘争や罪惡の根源たる自愛と考へられるものも、アガペの一面でなければならぬ。而して眞に自己自身を愛することは、自己自身を否定することではならぬ。自愛そのものが矛盾である。そこには理性の詭計といふものも考へられるのである。

以上述べた如く考へるならば、我々は我々の人格的生命の底に、絶対のアガペ的統一として、神の社會といふ如きものを考へざるを得ない。そしてそれが神の人格と考へられるものでなければならぬ。個人的自己の人格的生命に於て、各瞬間の私が他の瞬間の私を汝と見做すことによつて私の人格的統一といふものが成立すると云つた如く、歴史的発展の各の點に於て、何處までも歴史に於てあり歴史によつて限定せられた私が、すべての他なるものを汝と見做すことによつて神の人格的統一とい

438

ふものが成立すると云ふことができる。各瞬間の私が他の瞬間の私を汝と見るといふことは、逆に私が他に於て私自身を見るといふことを意味し、自己自身の内に絶対の他を見るといふことによつて我々の個人的人格といふものが考へられる。その様に、歴史的に唯一なるものとして限定せられた私が絶対に他なるものを汝として絶対の他に於て私を見るといふことは、神の人格を意味するものでなけ

ればならぬ。キリスト教に於て云ふ如く、アガペは神のものでなければならぬ、神のアガペによつて人間のアガペが成立するのである。個人的自己の立場からはアガペといふものは考へられない。而もアガペといふものなくして我々の人格的自己といふべきものはない。我々の人格的統一と考へられるものは神の人格によつて基礎附けられて居るものでなければならぬ。個人的自己の自覚と考へられるものは人格のラティオ・コグノスセンディとなるかも知らぬがそのラティオ・エスセンディではない。絶対のアガペ的限定として社会的と考ふべき神の人格的限定によつて、之に於て無數に社会的な人格が限定せられるのである。恰も永遠の今の自己限定として無數の時が限定せられると一般である。而してかゝる絶対のアガペによつて限定せられると考へられる我々の自覺的自己の立場から、自己自身の底に絶対の他を見て行くと考へる時、我々を限定する無限の社会的限定といふものが考へられなければならない。我々は何處までも社会的・歴史的に限定せられて居ると考へられねばならない。而もそれが我々を否定すると共に我々を生むといふ意味を有するかぎり、人格的として客観的精神と

434

いふ如きものが考へられるのである。その内容は一なる人格的内容とも考へられるのである。而してかゝる社会的・歴史的発展の過程は何處までも辯證法的と考へられなければならない。私のアガペといふのは感傷的な所謂人類愛といふ如きものを意味するのではない。絶対の否定を含む所に、眞にアガペのアガペたる所以があるのである。テルトゥリヤヌスと共に神の一面に物質性を認めることもできる。神の社会といふも天上に於ける天使の國を意味するのではない。それは歴史の底に我々の人格的生命を基礎付けるものでなければならぬ。但し單なる非合理性とか單なる物質性といふ如きものから何物も出て來ない。辯證法的運動といふ如きものもそれから考へられない。

私は我々の人格的生命と考へるものを以上述べた如きものと考へ、種々なる意味に於て生命と考へられるものはかゝる立場から考へられねばならぬと思ふのである。すべて具體的有と考へられるものはかゝる意味に於て自己自身を限定すると考へられなければならない、私の云ふ如き意味に於て社会的・歴史的でなければならない。物質とか自然とか考へられるものも、それが時間的に自己自身を限定し、それからすべてのものが出て來ると考へられるかぎり、かゝる意味を有つたものと考へなければならぬ。自己の底に絶対の他を見ると考へられる人格的自己の自己限定の絶対否定の方向に於て、物質とか自然とかいふものが考へられるのである。合目的的世界といふ如きものも、人格的自己の自覺の立場から自己自身を對象化することによつて考へられるのである。アガペといふ如きものをかゝ

440

る形而上學的原理と考へるには、多くの異論があるでもあらう。併し私のアガペといふのは辯證法的な歴史的限定を基礎付ける社会的原理を意味するものに外ならない。屢云つた如く、自己の内に絶

封の他を見、逆に絶対の他に於て自己を見るといふことによつて眞に人格的自己の自覺といふものが考へられるのである。絶対の他に即することなくして眞の自覺といふものは考へられない。人格的自覺の要素として衝動的欲求と考へられるものも、理性的當爲と考へられるものも、皆アガペの契機として考へられるのである。而して人格的自己の世界といふものの外に、眞に具體的なる實在界と考へられるものはあり得ない。

## 二

私は今私の立場から種々なる生の哲學を詳論する暇はないが生の哲學と考へられるものは、その形而上學的たると認識論的たるとを論ぜず、皆以上述べた如き生命の意味によつて基礎附けられねばならぬと思ふ。我々が自己の内に絶対の他を見、逆に絶対の他に於て自己を見るといふことによつて、行爲的自己の自覺として人格的自己といふものが考へられ、絶対の他を汝と見做すことによつて人格的自己の生命と考へられるものが成立するのである。斯く考へるならば我々の人格的生命と考へられるものはアガペ的統一として、固社會的といふべく、かゝる社會的統一が成立すると考へられるかぎ

441

り、我々に人格的自己の統一即ち内的連続といふ如きものが考へられるのである。斯くして眞に生命の内容といふべきものは人格的内容といふべく、人格的内容といふものがイデア的内容と考へられるものとするならば、我々は行爲によつてイデアを見て行くと考へることができる。ベルグソンの純粹持續といふ如きものは私の人格的自己の内的連続といふ如き立場を何處までも徹底的に押し進めたものと云ふことができるであらう。行爲的自己の自覺の立場に於て自己の底に何處までも自己を否定すると共に自己を生むもの、我々がそれに於て没すると共にそこから生れると考へられるものを見る時、無限なる生命の内的連続といふ如きものが考へられるであらう。我々がそれに於て没入することによつて生れるといふ意味に於て、内的生命の創造といふ如きものを考へることもできる。併し我々の眞の生命といふべきものは、單にかゝる意味に於て考へられるものではない。絶対の他に於て自己を見る?ち絶対の死から蘇るといふ所に、眞の生命と考へられるものが考へられるのである。時といふものが單なる連続として考へられるのではなく、非連続の連続として考へられねばならぬ如く、眞の生命といふものも、かゝる意味に於ける連続として考へられるものでなければならぬ。生命の一面には空間性、物質性がなければならぬ。ベルグソンの自己といふのは、單なる直觀的自己であつて行爲的自己ではない。ベルグソンの自己には死といふものがないと共に、それは眞に生きて働く自己ではない、眞の客觀性といふものを有たない。我々の眞の自己は歴史に於て生れ、歴史に於て働くもの

でなければならない。

知るといふことも、行爲的自己の自己限定として、一種の行爲と考へられるものでなければならない。行爲といふのは、單なる外的運動を意味するものでもなければ、單なる内的意識を意味するものでもない。自己自身の底に絶対の他を見、他に於て自己を見ることによつて、即ち外を内と見ることによつて、行爲的自己の自己限定といふものが考へられるのである。我々の人格的自己の統一と考へるものがアガペ的限定として社會的意義を有し、絶対のアガペ的限定によつて社會の中に社會が限定せられるといふ意味に於て成立すると考へるならば、行爲的自己の自己限定の内容と考へられるものは表現の内容の意義を有つたものでなければならない。我々が自己自身の底に絶対の他を見、絶対の他に於て自己を見ることによつて自己が自己であると考へる時、自己に對するものはすべて汝の意義を有し、自己自身を表現するものと考へられねばならない。我々の個人的自己の自己限定の内容と考へられるものも、それが社會的と考へられるかぎり、表現的と考へることもできる。我々は自己自身の體驗の内容を了解すると考へることもできるのである。我々の體驗の内容と考へられるものは、私の所謂行爲的自己の自己限定の内容と考へるものに外ならない。行爲的自己の自己限定の内容と考へられるものが我々の人格的自己の生命の内容と考へられるものであり、アガペ的限定によつて社會的

統一といふものが考へられるかぎり、體驗の内的連續といふ如きものが考へられるのである。行爲的自己の立場に立つて自己の底に絶対の他を見ると考へる時、すべて自己に對するものは了解の對象たらざるものはない。了解とはかゝる意味に於ける行爲的自己の自己限定を意味するに外ならない。斯くして私の行爲的自己の自己限定の立場からディルタイの生の哲學の如きものを考へることができるであらう。行爲的自己の立場に立つて何處までも自己自身の底に汝を見る時、帥ち絶対の他を汝と見る時、我々は自己自身の内に歴史を見ると考へることができる。そして構造、聯關といふ如きものは社會に於て社會を限定する即ち人格的統一に於て人格的統一を限定するといふ意味に於て考へられると云ふことができるであらう。

併し知るといふことは單に了解することではない。行爲的自己の立場に於て汝として私に對して立つものは、單に了解の對象たるのみならず、私を私として限定する意味を有つたものでなければならない。個人的自己の自覺に於て此瞬間の私が他の瞬間の私を汝として限定すると共に他の瞬間の私が此瞬間の私を汝として限定する意味を有つてゐなければならない。社會的限定として我々の個人的自己の自覺が成立するのである。自己に於て他を見ると共に、他に於て自己を見るといふ意味がなければ

ならぬ。我々の個人的自己の體驗の内容と考へられるものは、一面に了解の内容と考へられると共に、一面に直観の内容と考へられるものでなければならぬ、私に直證的なものでなければならぬ。單

444

に汝と考へられるものは、單に了解の對象といふこともできるであらう。併し私に對して私は了解の對象となるのみならず、直観の對象と考へられるものでなければならぬ。私が此に直観といふのは各瞬間が絶對として他を限定するといふことを意味するのである、各瞬間が永遠の今に接するといふことを意味するのである。論理的には個物が一般を限定するといふことを意味するのである。それは現在に於て無限なる過去と未來との兩端が結び付くと考へることもできる。我々の個人的自己の自覺と考へられるものは、かゝる直観の過程として成立するのである。人格が人格に於て限定せられ、社會が社會に於て限定せられると考へるならば、我々の社會的限定と考へられるものに於てもかゝる直観の意義が考へられねばならぬ。社會は自己の中に自己を見て行くと考へることもできる。外を内となす我々の行爲的自己の自己限定にはかゝる意味がなければならぬ。我々が社會に於てあり社會によつて限定せられると考へられるかぎり、我々の知識は單にイデオロギッシュとも考へられるであらう。併し歴史は我々に對して單に了解の對象となるのみならず、當爲の内容として我々を限定する意味を有つてみなければならぬ。我々の社會と考へるものに人格的統一といふものが考へられるかぎり、斯く考へられなければならぬ。併し我々の人格的自己の究極的根柢として社會的限定と考へられるものは、上に云つた如く絶對のアガペ的限定として神の人格といふ如きものでなければならぬ。我々の人格的自己の底には絶對の死によつて生きるといふ意味がなければならぬ。我々の人格的自己

445

とは絶對の否定によつて媒介せられるものでなければならぬ、限定するものなきものの限定として限定せられるものでなければならぬ。そこに我々の人格は單に非合理的なるものを根柢として考へられる所謂社會とか歴史とかいふものを越える意味を有つて居るのである。云はゞ、超時間的な社會的限定といふ如きものを考へることができるのである。我々は行爲によつてイデヤを見ると考へることができる。そして時が永遠の今として限定せられると考へられる如く、歴史といふものが神の人格的限定として考へられるとするならば、我々は行爲によつて歴史を構成して行くとも考へることができる。環境が個人を限定し個人が環境を限定し、環境と個人との相互限定として歴史が動いて行くのである。その一步一步に於て絶對の否定に接し、絶對の死から生れるといふ所に、歴史的過程の意味があるのである。その一步一步にイデヤを見るといふ意味がなければならぬ。歴史的限定を單にノエマ的と考へるならば、歴史主義は相對主義に陥るの外ないであらう。併しそのノエシス的限定の意味に於ては、いつもイデヤを見るといふ意味がなければならぬ。絶對の他に於て自己を見るといふ所

に、アイデアを見るといふ意味があるのである。そこに価値の客観性といふものが立てられるのである。アガペの限定によつて価値の客観性が基礎付けられるのである。かゝるノエシス的限定の意義なくして歴史的限定といふものは考へられないであらう。

我々の概念的知識と考へられるものは、固、一種の表現的内容と考へられるものでなければならな

446

い、ロゴズ的内容といふものでなければならぬ。かういふ意味に於てそれは了解の内容と考へることができる。併し單に了解することは認識することではない。知るといふには超越的自己の自覺の意味がなければならない。そこには、我々が自己に於て絶対の他を見ると共に、絶対の他に於て自己を見るといふ意味がなければならない。それは自己自身の内に中心を有つた社會的限定と考へられるものでなければならぬ、限定せられた社會的自己の自己限定の意味を有つたものでなければならぬ。右に云つた如く、絶対否定を媒介とすることによつて我々の人格的自己の自己限定といふものが考へられるのであり、絶対否定の立場に於て所謂時を越えた人格的自己の自己限定といふ如きものが考へられねばならぬ。かゝる限定が廣義に於て理性と考へられるものであり、そこに絶対に我々の個性を否定する理論的理性の立場といふ如きものも考へられるのである。個性を否定する社會的限定の立場に於て、即ち自己自身を否定する人格的自己の立場に於て、知識の立場といふものが考へられるのである。かゝる立場に於て、自己の内に絶対の他を見ると考へられる時、了解の立場といふ如きものが考へられ、絶対の他に於て自己を見ると考へられる時、認識の立場といふ如きものが考へられる。後者に於ては個物が何處までも一般者によつて限定せられると考へられるのである、社會が社會に於て自己自身を限定すると考へられるのである、即ち行爲的自己の自覺の意義が見られるのである。我々の人格的自己の一面にかゝる意義を有するかぎり我々は認識すると考へるのである。之に反し、了

447

解主觀の意義に於てはかゝる自覺の意義が含まれない、唯、何處までも自己に於て他を見て行くと考へられるのである。従つて、さういふ立場から法則的知識の根擦といふものが明にせられない。それは人格的自己の自己限定の一面として歴史的認識主觀の意義を有すると考へられるかも知れぬが、歴史を限定するものはそれから出て來ない。併し了解するものも、固歴史に於てあり歴史によつて限定せられたものでなければならぬ。了解するといふことも行爲的自己の自己限定として歴史に於ける行爲の意味を有つてゐなければならない。その根柢には生命の辯證法的限定の意義がなければならない。我々が人格的自己の立場に於て他の一切を汝と見る時、而して自己がかゝる社會的限定の外にあると考へる時、單なる了解主觀といふ如きものが考へられるであらう。併し實際、かゝる超越的なる了解主觀といふ如きものがあるのではない。了解と認識とは行爲的自己の知的自覺の兩面といふ如き

意味を有つて居ると考へなければならぬ。従來、了解主觀を中心とした生の哲學と考へられるものは、かゝる意味に於て一面的であると考へざるを得ない。-

我々の個人的自己の人格的統一と考へられるものに於ては、各瞬間が私と考へられるに對し、他の瞬間が汝といふ意味を有つてゐなければならぬ、即ちその統一は社會的といふ意味を有つてゐなければ

448

ばならぬ。それが一つの統一として個人的自己といふものが考へられるのは、かゝる限定に於て私が汝であり汝が私であると考へられるによるのである。汝を限定するものが私を限定するものであり、私を限定するものが汝を限定するものであると考へられるかぎり、個人的自己の自覺的統一といふものが考へられるのである。そこには、社會的なるものが自己に於て自己を限定するといふ意味がなければならぬ。併し私と汝とが單に一つであると考へられるならば、そこに私といふものもなければ、汝といふものもない、それと共に入格的自己の自覺といふものも考へられない。私と汝とは絶対に他なるものでなければならぬ。絶対に他なるものの結合として、即ち非連続の連続として我々の自覺的統一といふものが成立するのである。それは限定するものなきものの限定として無の限定といふべきである。かゝる限定は自己の底に絶対の他を含むと考へられると共に自己が絶対の他に含まれて居ると考へられるものでなければならぬ。それは個物が一般を限定し一般が個物を限定する辯證法的運動と考へられるのでもなければならぬ。我々の個人的の人格的統一に於てかゝる限定が考へられねばならぬが、個人的自覺はラティオ・コグノスセンディであつてラティオ・エスセンディではない。歴史的限定を離れて人格的自己といふものはない。絶対の死から蘇るといふ所に個人的自己の人格的生命があるのである。"

知るといふことは行爲的自己の自己限定として、知るものと知られるものとの關係は、各瞬間の私と全人格の内容との關係から考へられねばならぬと思ふ。自己は絶対に獨立であり、自由であり、主觀と客觀とは絶対に相封立すると考へられると共に、自己は何處までも知られる世界、即ち客觀から限定せられ、それに於てあるのである。一般者の自己限定によつて知識が成立すると、いふことは、人格的社會の自己限定の意味を有つてゐなければならぬ。かゝる限定の形式に於て種々なる知識が考へられると思ふ。我々が人格的連続の一つの織として人格的自己の自己限定の立場に立つ時、私に對して立つものはすべて汝の意味を有つてゐなければならぬ。かゝる世界の内容はすべて表現的と考へられるものでなければならぬ。かゝる立場に於て自己自身の内に何處までも他を見ると考へる時、了解の立場といふものが成立つと云ふことができる。人格的連続の一つの點が何處までも他を含むといふことは、それが全人格を代表することを意味し、對象界を人格的に見るといふことを意味する。かゝる行爲的自己の自己限定の意味に於て個性の認證即ち歴史的認識といふ如きものが成立つと考へ

られるのである。之に反し、人格的連続の各點は人格的統一に於てあり、何處までもそれによつて限定せられると考へる時、即ち自己が絶対の他から限定せられると考へる時、かゝる自覺の自己否定的契機によつて一般的法則の認識といふ如きものが成立するのである。自己に於てあるものは、すべて一般的自己によつて限定せられると考へられるのである。前者に於ては知るものの個性とか時代とかいふものが中心となるが、後者に於ては何處までも此の如きものは否定せられねばならない。了解的

450

なると共に自己限定的意味を有する行爲的自己限定の具體的形式としては、類型といふ如きものを考へることができるであらう。かういふ立場からは、すべて知識は類型的意義を有つて居ると考へることもできる。直觀的と考へられるものは行爲的自己の自覺の内容といふことができる。自覺の辯證法的限定に於て限定するものとせられるものとが一と考へられるかぎり、即ち自己自身を限定する獨立の人格的統一といふものが成立するかぎり、直觀的内容といふ如きものが見られるのである。併し此等の種々なる問題を論ずるのは後日に譲らねばならない。

451